

柿 生 文 化

柿生郷土史料館 情報・研究誌

住所:川崎市麻生区上麻生 6-40-1

柿生中学校内

電話:070-1503-6401、044-988-0004

第 85 号

柿生文化に寄せて

校長 財田 信之

(柿生郷土史料館館長)



4月1日付けで、東橋中から、伝統と歴史のある柿生中学校に着任いたしました校長の財田(たからだ)と申します。柿生郷土史料館の館長に任命され責任の重さを感じるとともに身の引き締まる思いです。微力ではございますが、一生懸命にやりたいと思っていますので、どうぞよろしくお願いいたします。

明治22年、町村制施行により柿生村外1ヶ村(岡上村)組合村が誕生し、柿の生産がすこぶる多かったことから柿生村と名付けられたと聞いております。秋には柿生駅前で柿まつりが開かれていることや、古い歴史をもつ王禅寺には禅寺丸柿の原木が残っていることなどを聞きました。

地域の皆様を中心とした史料館支援委員の方々のお話を伺っていると、史料館並びに、柿生地区に対する熱意に圧倒されます。柿生郷土史料館は、地域住民と柿生中学校が連携してできた全国初の郷土史料館で、地元の文化財を広く地域住民に公開展示し、郷土の歴史や文化を研究する施設として設立されました。長年、支援委員の中心となって史料館を支えてくださった故小島一也様、故郷へお戻りになる板倉敏郎元校長、お二人のご尽力に感謝の意を申し上げます。史料館への熱い思いは受け継いで参ります。

柿生中学校周辺では現在、工事も多く、めまぐるしく周囲の状況が変化してきているようです。急速に変化していく時代の中で郷土を見つめる目を持ち、柿生中学校の生徒だけでなく地域の皆様が、目で見て肌で感じ取れるよう、地域文化の発信基地として努めていきたいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

天保の飢饉 王禅寺村はその時どうした(3)

*** 志村家文書が語る江戸時代後期の村の姿と人々の動き ***

84号では、天保の飢饉と米穀高騰や百姓一揆・打ち壊し等に関連して、「関東取締代官」「八州廻(はっしゅうまわり)」の仕事やその性格について考えてみました。

今回は、天保7年(1836)9月以降の王禅寺村の様子を見てみましょう。志村家文書の天保7年9月の「米穀御調に付き書上帳」には「当年稀(まれ)なる凶作のため米穀が高値となり貧民が大変困窮している。したがって家族の十月までの食料となる米、支払う手当などを差し引き、余りの米穀を調べ、余剰の米穀は江戸や隣村の米屋に売り払うように」という代官所からの通達があり、それを請けて名主が村人に同内容の指示を出しています。これは江戸周辺地域で流通している米の量がかなり不足していたことを物語っています。

このような中、11月には村人が代官所からの通達に違反して次のような事をしたと書かれています。「今年の夏以来、親類の者に米穀を用意するよう頼まれ、米を糶(せり)買い(米を手に入れるため、高い値段を付けて売り手から購入すること。米価高騰の原因になる)した事が発覚、米穀の売買を禁止された」とあります。ところが、さらに村人の中には「隣村に入り込み、素人の家に入り米を糶(せり)買いしたことが判明し、関東御取締御出役(八州廻)からもきついおしかりを受けた者がいた」とあります。当時、同じような事で神奈川宿の紺屋が召し捕らえられ、更に近くの村の百姓富蔵も取り調べを請け、川崎宿まで送られた事などが分かっています。王禅寺村では役所に、事件の関係者と名主・年寄りが連名で、今後このようなことが二度とないようにするとの、お詫びの一札(証書)を出しています。名主もずいぶん苦労したようです。

近隣の小野路村(現町田市)にも当時の様子を知る手がかりとなる、小野路村名主小島家の文書が伝えられています。それによりますと、天保7年7月18日の記述には「七月十七日からの雨は朝より東南の風が吹き、雨降り止まず、堀や川筋は残すことなく冠水し街道にも水が流れ込んだ」さらに「今年は春から雨が早く諸作物の生育は大変悪かった。したがって関東一円は一般的に世の中が不穏で、穀物は高騰している。贅沢をしている農家や町人に至るまでこの状況を不吉なこととは夢にも思っていないようだが、親類の高座郡上溝村の老人が、天明四年の気候と大変よく似ているという言葉を聞き、安心できないと考えている」さらに「この状況を領主に報告し飢饉の可能性を訴え、蔵にある穀物の在庫を確認。物価高騰のきっかけとなる穀物の売り買いをしない事などが肝要である」などと小野路村の名主も事の重大性を案じています。

小野路村も王禅寺村も同じような状況があったようです。どちらの村の名主も米穀の買い占めによる米価の高騰に大変神経を使っていたように思えます。

(文:板倉)
(史料:志村家文書「差上申御請証文之事 天保7年7月」、小島家文書「小島日記 天保7年7月」)



天明飢饉之図(江戸時代中期)

シリーズ

「麻生の歴史を探る」第55話

麻生の寺院(5) 善正寺・愛染明王(白鳥社)

小島 一也 (遺稿)

片平の善正寺の創始は前稿修廣寺とは異なり、この地の豪族の創建で、新編武蔵風土記稿には「除地、二百五十坪、村の南の方にあり、日蓮宗、相模国鎌倉妙本寺末なり、妙永山と号す、開山は善覚院日秀、永正十七年十月十二日寂す、開基善正日中は、元当村を領して、北条家に仕えし大熊修理亮が先祖なり、永正二(1505)年二月十五日卒す……」としています。

この善正日中(俗名大熊善正)は、没年から推して北条家の家臣ではなく、時は戦国動乱の世、この地に所領を得た戦国武将と思われ、法華経(日蓮宗)に帰依し、遷化の前年(永正元年1504)善正寺を建立しており、後、この大熊氏は北条氏に仕え、永禄二年(1559)の、「小田原衆所領役帳」には、「片平郷 領主大熊修理亮、貫高二九貫九〇〇文」と記載されており、修理亮は善正の孫にあたり、善正寺は領主大熊家の菩提寺であると共に、法華経信仰農民の檀那寺でもありました。

時は移り、天正十九年(1591)小田原北条の滅亡は、領主大熊家の運命を大きく変え、善正寺の法灯は、地元檀徒の手に託されることとなりますが、この寺には、寺宝とされる「木造日蓮上人坐像」があり、座高37.8cmの底部には「下総平賀本土寺、第十八嗣法日輝(花押)。寛永二十一甲申年十一月十三日」の墨書銘が記されており、これは日蓮上人の故郷、下総平賀の本土寺から善正寺に贈られたもので、寛永という三代将軍家光の時代で、よく檀徒が善正寺を護持し日蓮宗に帰依していたかが分かります。

なお、この片平村内には、日蓮宗帰依の有力者が多く、文政十年(1827)七日、台風で本堂、庫裏、番神堂などが崩壊し、村内に再建勸化帳が出されたところ、近村の信徒を含め約70名の金子や木材の提供者があった(市社寺報告・安藤文書)と記されているとのこと。

だが、浮き世時節は変わるもの、大正十二年(1923)の関東大震災は本堂、庫裏を全壊し、加えて、農村恐慌はこの寺を無住にしていまいます。それを再建するのが、中興の祖と謂われる第二十八世望目辨修師で、昭和三年(1928)入山、檀徒によって本堂の再建、境内の整備が行われ、「歌碑の寺」と、面目が一新されることとなります。この寺域は、開基善正日中(大熊善正)の屋敷跡といわれ、そこには「祖先、新羅王(源義光)に従い移住するという、大熊弾正という者あり……」と記された石塔が残されています^(注)。

なお、この善正寺という寺については、新編武蔵風土記稿は、片平村白鳥明神社の項で、「例祭九月二十六日、善正寺の持なり、慶長年中の棟札を納む、神体は愛染の像を鉄に鑄しものなり……」と記しています。白鳥神社といえば、日本武尊と白鳥の故事で知られ、日蓮宗の寺の「善正寺持ち」は意外ですが、それは、御神体が愛染明王像(主祭神は日本武尊)であるからで、この坐像は高さ20cm、膝張り14cm、赭(赤)顔、玉眼で、江戸時代天保十年(1839)の作で、愛染明王とは大日如来の化身で、愛欲を悟る密教神とされ、日蓮宗には、お曼荼羅と呼ぶ仏を顕した図柄がありますが、それには右に不動明王、左に愛染明王(3つの目と6本の腕で衆生を救う仏)が描かれており、日蓮宗では大切な仏になっています。

この白鳥神社の愛染明王について、地元古老の話では、「昔、正徳四年(1714)、片平領主前場権太郎が白鳥明神の修復を村内に呼び掛けたところ、善正寺十三世の日蓮上人を代表とする村民がこれに協力、領主前場氏は感謝して、その際、「白鳥明神といえども本地は如来であり、法の根拠は法華経にある」と述べた」といい、その告文は今も残されているとのこと(麻生老人クラブ調べ)。

これは、神仏混淆の時代、善正寺は白鳥神社の別当寺(神宮司)であったと思われ、檀徒に勢力があったことからの為政策で、なお新編武蔵風土記稿は大神宮(神明社:村の中央)、天神社(村の東)も善正寺の持だったと記しています。

なおこの前場権太郎は、この後まもなくの享保三年(1718)に不祥事を起こし、前場家は断絶。前領主と家老の墓は善正寺に^(注)、その先代であろう久三郎勝秀の墓(前場院殿半入宋圓居士)は修廣寺の長瀬家墓地内に現存し、前場家は宗派にこだわらなかつたことを表しています。

参考文献:「新編武蔵風土記稿」「川崎市史」「麻生区の神社と寺院」「歩け歩こう麻生の里」「町田市史」

(編集者注):石塔、墓とも現存していません。その経緯も不明です。



善正寺



白鳥神社の愛染明王

日の丸あれこれ (6)

小林 基男 (柿生郷土史料館専門委員)

◆「日の丸」と日本人◆

国旗は世界中全ての国々が持っています。現在国際連合に加盟が認められている国は、193ヶ国なのですが、このうち何ヶ国の国旗を見分けることが出来るかという、私は全く自信がありません。皆さんはいかがですか。何故こんなことを言い出したかという、夫々の国の国民が国旗に対して抱く感情が、国によって大きく違っているように思うからです。国民が国旗を神聖視して、国旗に対しては常に直立して右手を胸に宛てて仰ぎ見る姿勢を取る国が多いように思うのですが、日本人が国旗に抱く感情は、大きく違っているように思うのです。それは日本人が国旗を軽んじているからではなく、国旗は愛すべきもの、親しみ慈しむものと受け止めているからに外ならないと、私は考えています。いくつか例を出しましょう。

◆「日の丸弁当」の世界◆

アルマイトの弁当箱にご飯を詰め、その中央に梅干を1個おいた「日の丸弁当」、年配の方は皆さんご存知だと思います。この「日の丸弁当」は、アジア・太平洋戦争の終盤、国内でも物資の欠乏が目立ってきた時期に、戦地の兵士を思いやって、困苦欠乏に耐える精神を養おうと、上流階級に属する家庭層から始められ、全国に波及したものでした。当然戦時中の話ですが、学童疎開が始まる前の東京の学校などでは、「日の丸弁当」以外の弁当は禁止という日が次第に増えていったそうです。ところで「日の丸弁当」は米飯に梅干ですから、当時の日本には米の飯を弁当箱いっぱい食べられるなんて何と羨ましいと、羨望の眼差しを向ける家庭層も多かったのです。

戦後の食糧難の時代、私を含む子どもたちにとって、銀シャリに梅干の日の丸弁当は、めったに口にすることのできないご馳走でした。戦後の農地改革は、日本の民主化の一環として、GHQの指令で始められたのですが、その結果、小作農のほとんどが自作農か自小作農となりました。こうした変化を受けて、戦前のような低賃金労働をどう確保するか、産業界の要請を受けた政府が知恵を絞って考え出した政策が、低米価低賃金政策でした。

日本人の主食は米飯です。米を腹いっぱい食べられれば、賃金が低くとも暴動はおきない。そう考えた政府は、戦時統制のうち、米の配給制を廃止せず、そのまま使うことにしたのです。米は政府が農家から自家消費分を除いた全量を買取る。その米を米穀商を通じて安く配給する。その結果、賃金が低くても適度に米が食べるので、しばらくは低賃金の労働者を確保することができたのです。

昭和30年代の初め、各地で失業対策として道路工事等が行われていました。この日雇い労働者たちの賃金が、当時1日240円だったところから、彼らはニコヨンと呼ばれました。雨の日は仕事がないのですが、1カ月に20日少々働くと、家族数人何とか食べていけたのです。当然銀シャリの「日の丸弁当」は無理でしたが、麦飯に梅干と沢庵少々のは、食べることが可能だったのです。いつか俺たちも銀シャリを腹いっぱい食べる身分になってみせる。社会全体にそんな空気が漲り、我も我もと誰もが猛烈に働いていたのが、1950年代半ばから60年代にかけての日本でした。「日の丸弁当」は、そんな日本の一時期を見事に代表していたのです。

◆「日の丸」と寄せ書き◆

地色が白色であることから、日本人は抵抗なく国旗に文字を書き入れます。2011年3月11日の東日本大震災後の同年6月、ドイツで行われたサッカーの女子ワールドカップで、見事に優勝したなでしこジャパンの選手たちが、国旗に被災地への連帯メッセージを寄せ書きして掲げたシーンを、ご記憶の方も多いと思います。

戦時中に出征する兵士たちに、「武運長久」とか「祝出征」などの文字と共に、何十人もの知人が各人名前を書き連ねた国旗を贈って、彼らを激励したことが、この行動の起源のようです。要するに、日本人は何の心理的抵抗も感じることなく、国旗に平然と物を書く、世界でも珍しい風習を持つ国民なのです。

というのも、国旗を神聖視する気風が根付いている国では、国旗に物を書く行為は、国旗を冒瀆する行為として忌み嫌われるのです。国旗を神聖なものとして捉えるなら、何かを書きこみやすい白が地色であっても、そこにビッシリと文字を書くなどという発想が、生まれることはあり得ないのです。



「ワールドカップ ドイツ大会」で優勝し、東日本大震災の被災地の皆さんへ、連帯のメッセージを寄せ書きした「日の丸」を掲げる選手たち



戦地で亡くなった兵士が持っていた「日の丸」 長い年月を経て遺族の手に…

日本人は、日の丸の国旗に愛着を持ち、そのシンプルな美しさに日本らしさを感じて、誇りに思っている。そして国旗は愛すべきものであって、畏敬の念を持って神聖視すべきものであるとは意識していないようです。だからこそ、平気で国旗に寄せ書きをして悪びれず、「応援しているよ」となるのです。国際試合の応援席が、両頬に小さな日の丸のシール貼った人たちによって、埋め尽くされる光景も同じ心理の現れですね。私はこうした感情の発露を肯定的に捉えています。皆さんはいかがですか。(完)

日本人は、日の丸の国旗に愛着を持ち、そのシンプルな美しさに日本らしさを感じて、誇りに思っている。そして国旗は愛すべきものであって、畏敬の念を持って神聖視すべきものであるとは意識していないようです。だからこそ、平気で国旗に寄せ書きをして悪びれず、「応援しているよ」となるのです。国際試合の応援席が、両頬に小さな日の丸のシール貼った人たちによって、埋め尽くされる光景も同じ心理の現れですね。私はこうした感情の発露を肯定的に捉えています。皆さんはいかがですか。(完)

第2回史跡見学バスの旅 好評裡に終了

4月21日(火)心配された雨も上がり、42名が参加した、小田原周辺の史跡見学バスの旅は、好評の内に終わることが出来ました。

小田原城址と天守閣をゆっくり見学し、老舗の割烹料理店での昼食を楽しみ、午後は 報徳博物館、小田原文学館を駆け足で見学して石垣山の一夜城址へ、見事な石組の城壁に、感嘆の声が上がりました。最後に魚センターで買い物を楽しみ、ほぼ予定通りに帰着しました。ご参加の皆様有難うございました。



柿生郷土史料館 6・7月催物ご案内 (入場無料)

◎開館日：偶数月は毎土曜日、奇数月は毎日曜日 (原則として月4回)

6月 6・13・20・27日 (毎土曜日)

7月 5・12・19・26日 (毎日曜日)

◎開館時間：午前10時～午後3時

第8回 特別企画展

新聞で見る近代日本の歩み展 (2)

◆◆明治・大正・昭和の歩みと人々の生活◆◆

会場：柿生郷土史料館特別展示室

(第2期) ◎明治の政治と対外関係 期間：5月24日(日)～8月22日(土)

第9回 事物の歴史 三二歴史資料展



王禅寺村「志村家文書」展示公開 (1)

◆◆天保の飢饉に関する文書をみる◆◆

期日：4月18日～9月20日

内容：王禅寺村「志村家文書」をもとに江戸時代後期の社会の姿と王禅寺村の様子について考えてみます。

第54回 カルチャーセミナー

鶴見川流域文化探訪シリーズ (5)

入門 鶴見川流域史 (古代編その2)

●鶴見川流域の古代と共通の流域文化を考える

講師 村田文夫氏 (川崎市民アカデミー副学長)

日時 平成27年6月20日(土) 午後1時30分～

内容 鶴見川文化の原点ともいえる古代鶴見川流域の歩みを紐解く

第55回 カルチャーセミナー

鶴見川流域文化探訪シリーズ (6)

入門 鶴見川流域史 (中世編その1)

●鶴見川流域史を古代・中世・近世で考える その第3弾!

講師 中西望介氏 (戦国史研究会会員)

日時 平成27年7月26日(日) 午後1時30分～

内容 中世前期における鶴見川流域諸勢力の変遷を追う

ついに完成!

ふるさと柿生の記憶をDVD化

第1弾

「身近にあった信仰の世界と人々の思い」

◆◆◆晩秋の上麻生「秋葉講」を訪ねて◆◆◆

柿生郷土史料館では、郷土に継承されてきた貴重な無形文化財を映像化し、後世に伝えたいと考えています。

この度、上麻生浄慶寺境内に在る秋葉神社を取材し、秋葉神社が長い間存続してきた意味や人々の姿を視点に入れながら、DVD制作に取り組んでみました。

なおDVDをご希望の方にはお分けしておりますので、柿生郷土史料館に直接お越しいただき、お申し出ください。なお、その際、史料館の諸活動支援のためご寄付にご協力いただければ幸いです。

